

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

朝でも昼でも夜でも、麻子^{あさこ}がねだるといつだって、おじいちゃんはずてきな手品を見せしてくれた。一つとして同じたねのはなかったし、たねがあるなどとは、麻子にはとても思えなかった。鳩^{はと}や花^{はな}といったかわいものばかりでなく、おじいちゃんは、広い舞台^{ぶたい}でなら、イルカだって取り出すことができた。コップ一杯の水を、さあつと空中にまくだけで、舞台の空中に、本物のイルカがとびだし、おじいちゃんのもつた輪の中をくぐって舞台のそでに消えた。①その舞台を見てからは、麻子にとつておじいちゃんのはもはや、手品師^{てんし}なんかではなかった。魔法^{まほう}使いだった。世界一の魔法使い。

じっさい麻子のおじいちゃん——天外宇宙^{てんがいそうちゅう}氏は世界一の手品師^{てんし}といつてよかった。世界じゅうの手品師と術くらべをしてもまず負けなかった。だれも天外氏の手品にかなう者はなく、その大ふしぎのたねのいくつを見やぶることができないはずだった。おじいちゃんの書いた手品の本はよく読まれ、いくつもの国にも訳されて読まれていた。日本でのコンテストではいつも優勝した。だから、世界——と折紙がつけられてもよかったのだが、天外宇宙氏にはたった一つの弱味があった。飛行機にのることがいやだったのだ。おじいちゃんの手品に「消す」術があり、家でもライオンでもゴリラでも一瞬^{いつしん}のうちに消すことができたが、自分ののっている飛行機を、うっかり消してしまうのが、こわくて——とおじいちゃんは言っていたが、ほんとに「高所恐怖症^{こうしよこふふしやう}」——高いところがこわいのだった。だからアメリカやヨーロッパで行われるコンテストに出かけたことはなく、「世界——」ときめることができないでいるのだった。

しかし、麻子にとつて、そんなことはどうでもよかった。②それよりもおじいちゃんが、いつまでも元気で、いつでもいくらかでも麻子のためにずてきな手品を見せてくれるだけで満足していた。

というの——

というの、麻子の大好きな、だいじなおじいちゃんについて、ちかごろ気になることがあるのだ。

物忘れがはげしくなっていた。

手品のたねやしかけのことも、それこそいつたりと忘れてしまい——スミレの花を出すつもりがネズミになついたり、ステッキを踊^{おど}らせるところを自分の靴^{くつ}を踊^{おど}らせてしま——いつい自分も踊^{おど}らされてしまうのだった。

すっかりおじいちゃんっ子になつていた麻子は、おじいちゃんの手品の公演はできるかぎりついて歩いて見ていたから、そのほとんどについてこまかなところまでよくおぼえていた。おじいちゃんは、ていねいに準備し、練習し、やりそこなうことなしにしてからしか手品をやらなかつた。だからこそ、逆に、つつい、いま思いついたようなやりくちみたい

うまくやってのけられるのだった。

それが、このところ不意におかしくなりだしていた。

けれど、だれもそのことに気がついていなかった。おじいちゃんの手品師としての名声があまりにも高かつたために、それに目がくらみ、おじいちゃんの小さなしくじりに少しも気づかなかつたのだ。

音楽にあわせて手にしたジョロの水をさあつとまくと——舞台にうそみたいに豆^{まめ}がつるをのぼし豆の花が咲き豆がなる——というおはこ^{おはこ}のときも、おじいちゃんはずいつたりとたねをましがえたために、豆のかわりに、ふつうのつたがのびてきてるをのぼし葉を上げさせた。花は咲かず実もならず、かわりにかわいいたカゲが二、三匹^{ひき}、葉っぱの間から顔をのぞかせたのは御愛嬌^{ごあいぎやう}だった。——麻子は不安になった。

このぶんだと、イルカのかわりにゾウでも出して、それとちゆうで落つこちて、おじいちゃんをおしつぶしてしまつたらどうしよう——と心配なのだった。

しかし、③見物は、そんなおじいちゃんの手品に大拍手を送り、プラウオー^{プラウオー}を叫んだ。

おじいちゃんもおじいちゃん、はじめからそうするつもりだったみたいにつたりと答礼し、とてもいい笑顔で拍手にこたえるのだった。

おじいちゃんが、衣装^{いしやう}の服のボタンをついかけちがつたり、ハンカチを忘れたり、鳩^{はと}を入れ忘れるのを見つけると、麻子はそつと助手のおねえさんに耳打ちした。おねえさんは、まさか？ という顔になるが、麻子の真剣な目つきに気押^{きおし}されるようにして調べては、あわてて準備しなおした。

おじいちゃんは、まぎれもなく、不意に、「ばけ」はじめていたのだ。そして、そうなった人のほとんどがそうであるように——そのことに気づいていなかった。

おまけに、そんなおじいちゃんに、アメリカとフランスから「招待」がきたのだ。世界一の魔術師ショーというやつに出演するように、うんとお金をつみ、ていねいに何度^{いくばく}も何度も交渉^{こうしょう}にきたのだ。おじいちゃんは、はじめのうちは、飛行機がこわいので断っていた。ところが、根負け——したというのではなく、ついうっかりと、そのことさえ忘れてしまつて、承知してしまつた。契約書^{けいやくしょ}にサインしてしまつたのだ。

そのことを知つたとき、麻子はほんとうのことを言つておじいちゃんにやめてもらおうと思つた。大好きな、だいじないおじいちゃん、麻子にとつて世界一の魔法使いであるおじいちゃんが、人の前で恥^{はぢ}をかかようなことになつてはならなかつた。

麻子は決心した。

ほんとのことを言うのだ。

けれど、麻子のためにおじいちゃんがしてくれる小さな手品を見るたびに（たとえばサクラソボを取り出すかわりにスモモを取り出してくれたとしても）——ついほえんでしま

〔注意〕 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

い、そんな麻子の笑顔を見てうれしそうに笑うおじいちゃんの顔を見ると、④麻子にはどうしてもほんとうのことが言えなくなってしまうのだった。

麻子にできることは——とにかくおじいちゃんの旅についていくことだけだった。

麻子もおじいちゃんのせいで飛行機にのるのがこわかったが（むりもない、あんなになんでもできるおじいちゃんがあるのだ。麻子がこわがってもあたりまえである）、目をつむって、おじいちゃんの横にくっついてとんだ。おじいちゃんは、まるでラクダにでものるように、にこにこのんびりと飛行機にのりこんでいった。

飛行機はときどき大きくゆれた。麻子はこわくて、隣のおじいちゃんの手をしっかりとにぎりしめた。すると、麻子は気持ちが悪く落ちてきた。こわいことがあっても、おじいちゃんなんとかしてくれる。いつものおじいちゃんならきつと、そうしてくれる……。

もう少しでアメリカにつくというときになって、一度とんでもないエア・ポケットに落ちたことがあった。千メートルも一度に落ちたのだ。一同とびあがってしまった。麻子は、おじいちゃんの手を力いっぱいぎゅつとにぎりしめた。こわかった。外を見ることがとてもできずに、おじいちゃんを目を見つめた。おじいちゃんの目に灯がともった。

（もどったんだわ）

麻子が見ていると、そんなおじいちゃんの中におびえが走った。いなすまのように、ちらりと走った。

（えらいものにつつまて、わしとしたことが……）という顔になった。一瞬、おじいちゃんはスチュワードスと呼んで、飛行機からおろしてもらうことを思いついたくらいだった。しかし、自分の手をにぎりしめ、おびえきった表情の麻子を見ると、自分のおびえを消した。そうしてやることでしか、孫を救えないこととおじいちゃんは知っていた。そのおびえは⑤では消せなかった。意志というか、孫への思いだけが消すことのできる力であった。

麻子は、おじいちゃんの中につつまている自分の顔を見つめていた。その小さな顔から、おびえがゆっくりひいていくのをちゃんと見ていた……。

しかし、飛行状態がもとにもどると、おじいちゃんの「ほけ」のようすも、もとにもどった。そしてそのままの状態でおじいちゃんは招待されたショーに出演した。麻子はいちばん前の真中の席で、おじいちゃんを見ていた。べつのおびえに体をこわばらせながら見つめていた。

おじいちゃんは、やはり麻子の心配していたとおり、何度もミスをやつてのけた。

腕が、指が思いどおりに動かないことに気づかず、おじいちゃんは、何度もいろんなものを取り落した。スマイレが落ち

て、金魚になった。空中を泳ぐ金魚を受けそこねて、ピンボンのボールにしまった。イルカのかわりに、シュモクザメを出してしまい、その顔のおそろしさにすくんでしまったおじいちゃんに、サメのやつはもう少しでかみつくところだった。ゾウをせんぶ消しきれずに、ゾウのしっぽがのこった。空中で指揮棒のようにゆらゆらするしっぽを見て、おじいちゃんは笑い出した。しっぽはおしまいは丸く輪を描きなから舞台のそでに舞いながらはいっていった。

どれもこれも、麻子には見てはいられなかった。あのすてきな魔法使いのおじいちゃんの「さっそう」としたやりくちは、どこへ消えてしまったのか。あのすてきなおじいちゃん身ごなしはどうなってしまったのか。

それなのに、だれ一人指笛を吹かなかったし、やじりもしなかった。拍手、拍手がつづいた。何人かはつめたい目で、この「おいぼれた世界」の手品師を見つめていたが、帰りはしなかった。

新聞も、口をそろえて、ほめてくれていた。

「世紀の魔術師、ニューヨークを征服」といった大見出しの活字を、助手がおじいちゃんに見せて訳して聞かせていた。

おじいちゃんはおつとりとわずき、自分のショーを放映してくれたテレビのビデオテープを見たがった。テレビ局の人がもつてきてくれたのをいっしょに見ながら、麻子はせめてそういうときに、おじいちゃんが気づいてくれることを祈った。

おじいちゃんは気づいてくれなかった。

にこにこしながら、自分の「ましがい」を見ていた。ましがいだらけの芸を見ていた。ましがいに気づかずには拍手する見物を見て——満足していた。

麻子はいなくなつた。

どうして大人はだれもほんとうのことを言ってくれないのか。書いてくれないのか。おじいちゃんをほめたふりをして——ほんとはあわれんでいることに——気づいてくれないのだから……。

⑥麻子は決心した、このままではおじいちゃんは枯葉になつてしまう。ほろりと落ちてみんなにふまれる枯葉。ふみつけられふみつけられても、だれも気にもしない枯葉の一枚に。あのすてきなおじいちゃんにもどることができないなら、せめて、おじいちゃんのはんとうの手品を見たり、本を読んだりおじいちゃんのことを好きだった人たちに、これ以上「ぼけて」しまったおじいちゃんを見せないことだ。

パリにはぜったいにいかせないことだ。

次の会場で、麻子は決心を実行にうつすことにした。

おじいちゃんが登場する。

にこやかにほえみ、昔と同じようなスマートなゼスチュアで手品をはじめ。ポケットから手紙を取り出し、切手を、

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

うまくはがす、それをてのひらに押しこみ、とんと合図するとチヨウになってとぶというやつ。

おじいちゃんはすっかりうまくやつてのけた。チヨウがとびだす。きれいな銀いろのシジミチヨウ。おじいちゃんは、空中をさぐる。ほんとならそこで捕虫網が取り出せるところなのに——おじいちゃんは、バットを取り出してしまった。

おじいちゃんの目に、一瞬、おびえが走ったが、かまわずバットをふりまわしはじめた。チヨウはうまくふうわりと網の中にはいるところが、ふりまわすバットにはたき落されてしまった。そこでまた一枚の切手にもどるところが、死んだチヨウのままでいた。

みんなはそんなものだ——と思っているので拍手した。手品のクロウトは、やりかたの汚さに目をそむけた。

おじいちゃんは気づかない。

またいつものいい笑顔でおじぎしている。

麻子が立ちあがり、口に指を入れてピイイツと、高らかに指笛を吹き鳴らした。

—みっともないわ！

⑦大人の御婦人みたいに、わめいてやつた。

—チヨウを殺すだなんて！

日本語だから、見物にはわからないことばだった。

しかし、それだけに耳につきささる強さで、ぼんやりしたおじいちゃんの耳にとびこんでいた。

はつとなつて——ワレに返つた表情のおじいちゃんを見て、麻子はもう一度大声をあげていた。

—やりなおしよ！ アンコールなんかじゃなくて、やりなおし！

⑧おじいちゃんの目に、むきになるいろがこもつた。

左のポケットから手紙を取り出した。切手をはがす。それからそつと空中に投げだす。

くり返しやりなおし——なのに気がついて、見物一同はしんとしてしまった。

チヨウがとびはじめる。きれいな銀いろのシジミチヨウ。おじいちゃんが腕をあげ、空中から網を——いや、ステッキを取り出してしまった。

正気にもどつていたおじいちゃんは、そのステッキをふりまわすようなことはしなかった。チヨウは舞わせておいてステッキを相手に踊りはじめた。ステッキも、おじいちゃんの真剣さにこたえてか——よく踊つてくれた。舞うチヨウといつしよにおじいちゃんは、踊りながら幕の内へはいっていった。

それからおじいちゃんの声でアナウンスが流れた。

⑨—ありがとうございます。わたしのショーはこれでおしまいです。これでおしまいにしたいのです。

英語が同じ内容をくり返し、見物の中をどよめきが流れた。どうして急に？ というどよめきだった。もつとつづけるという拍手が高鳴った。いまやめるのはインチキだという指笛

が吹かれた。けれど、おじいちゃんは二度と舞台にあらわれなかった。

主催者が出てきて、ていねいにおじぎして、ショーの「中止」を告げた。見物席がしんとした。

⑩いちばん前の席で、一人の女の子が立ちあがって叫んだ。

⑪—ブラヴォー！

麻子ちゃんであつた。泣きながらブラヴォーをくり返していた。見物はあつけにとられて黙りこみ、それから、小さな拍手が起り、波だち、ひろがつていった。

すっかりおとなしくなつたおじいちゃんといつしよに、麻子は飛行機にのつていた。

おじいちゃんは、まるで自転車にでものつているみたいにたのしそうな顔で外の雲海を見ていた。パリ公演はキャンセルにして日本へ帰るところだった。

(よかつた。あのときの指笛で正気にもどつて下さつて。自分のほんとうの姿に気がついて下さつて……)

⑫麻子は大人の女の人のように思つていた。

むこうの席でだれかがしきりにこちらを見ていた。隣の席の男に話しかけていた。若い美しい女性だった。やおら立ちあがつてこちらにやつてきた。

そして、おじいちゃんの前に一冊の本をさし出して、—サインを、天外先生。

と言つた。

おじいちゃんは、ほとんど習慣的にペンをとつてサインした。

—ありがとうございます、先生。わたしも手品のほうを勉強します。

おすおすと言つた。

—いつか先生の半分にでもなることができれば光栄です。

—あ、いや……。

もによもによと、あとは口の中で言いながら、おじいちゃんは、いつものとても優しい笑顔で、その女性を見つめ返した。女性の目に尊敬のまなざしが見えたのに、麻子は満足した。

—おたつしやで。

—あ、いや……。

(よかつた。これで、⑬枯葉は枯葉でも、きれいに押葉にされ、かざられ、だいににされる枯葉に、おじいちゃんはあるのよ)

麻子は、ほつとしながらそう思い、一方では、よおし、わたしはまだ若葉、いや双葉だけど、おじいちゃんのをとつぐぞ——と思いたち、おじいちゃんのケースから、おじいちゃんの書いた本を取り出して、そつと第一ページをめくつて読みはじめた。

(今江祥智『枯葉』)

〔注意〕答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

問1 傍線部①「その舞台を見てからは、麻子にとっておじいちゃんとは、手品師なんかではなかった。魔法使いだった。世界一の魔法使い」とあるが、なぜ麻子にとって「手品師」ではなく「魔法使い」なのか、「手品師」と「魔法使い」の違いに注意して説明しなさい。

問2 傍線部②「それよりもおじいちゃんが、いつまでも元気で、いつでもいくらでも麻子のためにすてきな手品を見せてくれるだけで満足していた」とあるが、麻子がなぜそう思うのか説明しなさい。

問3 傍線部③「見物は、そんなおじいちゃんの手品に大拍手を送り、ブラヴォーを叫んだ」とあるが、なぜ「見物」がそうしたのかを説明している一文を文中からさがし、その最初の十字をぬき出して答えなさい。(句読点を含む)

問4 傍線部④「麻子にはどうしてもほんとうのことが言えなくなってしまうのだった」とあるが、なぜほんとうのことが言えなくなってしまうのか、説明しなさい。

問5 ⑤に入る語句を、文中より漢字二字でぬき出して答えなさい。

問6 傍線部⑥「麻子は決心した、このままではおじいちゃんとは枯葉になってしまう。ほろりと落ちてみんなにふまれる枯葉。ふみつけられふみつけられても、だれも気にもしない枯葉の一枚に」とあるが、ここでいう「枯葉」とはどのようなことをたとえているのか、説明しなさい。

問7 傍線部⑦「大人の御婦人みたいに、わめいてやった」とあるが、なぜ麻子は「大人の御婦人みたいに」「わめいてやった」のか、説明しなさい。

問8 傍線部⑧「おじいちゃんの目に、むきになるいろがこもった」とあるが、なぜ「やりなおし」という言葉によって「むきになるいろがこもった」のか、説明しなさい。

問9 傍線部⑨「「ありがとございました。わたしのショーはこれでおしまいです。これでおしまいにしたいのです」とあるが、この言葉にこめられたおじいちゃんの気持ちを説明しなさい。

問10 傍線部⑩「いちばん前の席で、一人の女の子が立ちあがって叫んだ」とあるが、ここで麻子を「一人の女の子」と言いかえて表現したのはなぜか、説明しなさい。

問11 傍線部⑪「「ブラヴォー！ 麻子ちゃんであった。泣きながらブラヴォーをくり返していた。見物はあつけにとられて黙りこみ、それから、小さな拍手が起こり、波打ち、ひろがっていった」について、
(i) 「泣きながらブラヴォーをくり返していた」時の麻子の気持ちを説明しなさい。
(ii) 「見物」の心の動きを、順を追って説明しなさい。

問12 傍線部⑫「麻子は大人の女の人のように思っていた」とあるが、麻子が「大人の女の人のように」思っていたのはなぜか、理由を説明しなさい。

問13 傍線部⑬「枯葉は枯葉でも、きれいに押葉にされ、かざられ、だいじにされる枯葉」とあるが、ここでいう「枯葉」とはどのようなことをたとえているのか、説明しなさい。

② 次の傍線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

① 彼の歌が本日のアツカンだった。

② 世界イサン。

③ 公平△シの態度をつらぬく。

④ 病院にシュウヨウされる。

⑤ カンセン道路。

⑥ 授業中にキヨシユをする。

⑦ 学校のエンカクを知る。

⑧ ゼイムシヨに行く。

⑨ 失敗についてのシヤクメイ。

⑩ 神社にサンバイする。

⑪ 牛をボクシヤに入れる。

⑫ 番組をロクガする。

⑬ 簡便な方法。

⑭ 敵を追討する。

⑮ 熟した木の実。

⑯ 早めに決済する。

⑰ 黒潮の流れが速い。

⑱ 地中に管を通す。

⑲ 都大路を歩く。

⑳ 漁業が栄えた町。

17	13	9	5	1
18	14	10	6	2
19	15	11	7	3
20	16	12	8	4

[illegible]